

クラウドファンディングを利用した 研究費獲得の課題と展望

白井 哲哉 京都大学 学術研究支援室 (KURA)

1. クラウドファンディング (CF) とは

不特定多数の人が通常インターネット経由で他の人々や組織に、財源の提供や協力などを行うことを指す (wikipedia)



2. クラウドファンディング (CF) が注目される理由

研究者がCFを利用するメリット

- ① 自分の好きなタイミングで資金獲得に挑戦できる
- ② 既存ファンドで獲得できない研究資金が得られる
 - ・従来、評価されなかった萌芽的な研究
 - ・研究の一部や周辺領域の活動
- ③ 資金獲得と同時に研究内容を社会に伝えられる
- ④ 研究に関する支援者の声を直接聞くことができる

大学等がCFを利用するメリット

- ① 新たな財源の獲得（研究資金、間接経費）
- ② 新たな研究の推進
 - ・萌芽/学際研究
 - ・研究者主導のタイミングで実施可能
- ③ 大学のブランディングに寄与
- ④ 大学が持つ社会（政策）的役割への対応

3. クラウドファンディング (CF) を大学等で利用する方法 (3つのパターン)

- A. 研究者個人が、外部のCFプラットフォームを用いる
B. 大学等が、外部のCFプラットフォームを用いる

- C. 大学/研究機関が、自らのCFのプラットフォームを構築し運営する

特徴① 外部業者に一部の業務を担ってもらえる

- 例：
 ■ サイトの運営 ■ 研究者へのCFの紹介 ■ 研究者からの問い合わせ対応 ■ 研究者へのチャレンジ計画アドバイス ■ 研究者への広報媒体作成支援&アドバイス
 ■ 資金の受入・管理 ■ リターンの作成・発送 ■ 研究成果の発信サポート

特徴② 外部業者が持つ情報発信メディアを利用できる

→ 支援者が訪れるWEBサイト等を新設しなくてよい

特徴③ 資金獲得に向けた情報発信のアドバイスもらえる

→ 資金集めの広報は特殊。そのテクニックを教えられる

特徴④ チャレンジが失敗した時のリスクが（一部）回避できる

→ 失敗し資金が集まらなくても、要した労力の一部は外部業者

特徴⑤ 成果発信の際の炎上等のリスクを（一部）回避できる

→ CFは支援者と直接繋がるため社会的信用（Public trust）への配慮は重要

特徴① 外部業者にマージンを支払わなくてよい

→ ただし、全ての業務を大学/研究機関と研究者が担う必要がある
→ 一方、学内にCF利用のノウハウは蓄積される

特徴② 学内の事務手続き（資金受入等）が効率化できる

→ 外部業者からの資金受入となるとその都度業者に合わせた対応が必要
（集めた資金の業者の取扱い方によって大学で受け入れる形も変わる）

特徴③ CFにチャレンジする研究テーマなどを調整できる

→ 研究テーマは職務が、適切か（デュアルユースetc.）の確認ができる
→ 大学/研究機関そのものの広報（ブランド戦略）に活かせる

特徴④ 大学に求められる社会（政策）的役割への対応となる

→ 参考：第5期科学技術基本計画「第6章 科学技術イノベーションと社会との関係深化」

現状

「A」の状況がほとんどの大学が（京都大学も）
「B」を実施している大学や組織も見られ始めている
「C」はプラットフォームを構築するコストと運営するコストが、CFを実施した「効果」に見合ったものでなければ実現が難しい



4. URAができること

トラブル 外部のCFプラットフォームを用いたとき

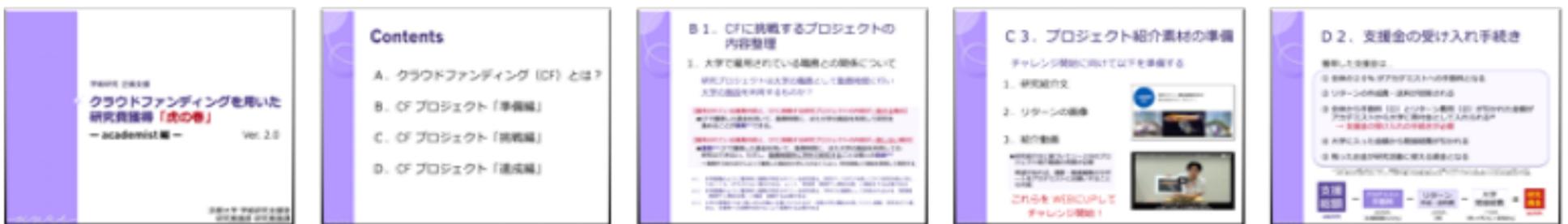
- 例1) 獲得した資金を大学に入れなければいけないことを、研究者が知らなかった
 - 例2) 獲得した資金を大学に入れる時、間接経費がかかることを、研究者が知らなかった
 - 例3) リターンの設定が不適切であった
 - 例4) クラウドファンディングの資金の受け入れが初めてのため、大学事務の担当者が戸惑った
- ※研究者が大学での職務として行う研究の場合



外部のCFプラットフォーム利用時の支援ニーズ

1. 研究者へのCFの紹介
「多くの研究者はクラウドファンディングを知らない」
「研究者は初めて聞く資金獲得方法に不安」
「挑戦の段取りやリターンの設定等がわからない」
→ 支援効果 → 研究資金獲得のチャンス増
2. 広報支援
「支援者が集まらないとお金も集まらない」
「支援者（非専門家）に伝わる研究紹介が必要」
→ 支援効果 → チャレンジ達成率のUP
3. 事務処理の対応
（寄付受入のスキームの整理と大学担当者への周知）
「研究者は自分の口座に入ったお金をそのまま使う場合も」
「突然事務にCFによる寄付の話があると混乱する」
「リターンの設定・間接経費に注意が必要」
→ 支援効果 → 研究者と事務との負担軽減

5. 京都大学での取り組み



6. クラウドファンディング (CF) の展望 ※私見

■ 研究活動における CF は普及するか？

- ・ 乱立していた外部のCFプラットフォームは淘汰され、利用環境は安定傾向
- ・ 利用者の拡大は、研究者のニーズ・大学/研究機関のニーズ・社会（政府・市民）のニーズ次第
→ ニーズは認知度、事例（良い事例/悪い事例）、経験等によって変化する

■ 研究活動における CF が普及すると、どうなるか？

- CFによる研究活動には「予算獲得・成果公開」時に専門家によるピアレビューがない
- ピアレビューがない
- ・ 研究活動の範囲が広がる
 - ・ 研究活動に関わる人が増える
 - ・ 研究成果の性質が変わる
- 社会の中のサイエンスの捉え方が変わる
研究者と呼ばれる人材が活躍する場所が変わる
→ “研究をする場”としての大学の存在意義が変化

■ CFによる研究費



専門家によるピアレビューが必要とされない

■ 従来の（国からの）研究費



「予算獲得・成果公開」時に専門家によるピアレビューがある